

自己表現能力を伸ばす歌曲創作活動の試み

高林涼介*・山崎浩隆**

A song writing project aimed to develop children's self-expression

Ryousuke TAKABAYASHI and Hirotaka YAMASAKI

1 はじめに

高等学校芸術 I における音楽教育の目的は、「音楽の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばす」ことであると現行の学習指導要領には記されている。幅広い活動とはすなわち歌唱、器楽、創作、観賞の4領域のことであるが、このうち歌唱・器楽・鑑賞の3領域は、教科書等に記載されている楽曲を演奏したり鑑賞したりすることが活動の中心である。これらは、他者が音で表現した世界(作品)を、楽譜や演奏音源を手がかりにして再表現するという活動であり、言うなれば二次的な創作活動である。その過程において、曲に対する奏者の感性が加わることで楽曲がより味わい深いものとなるのであり、その奏者の個性=創造的な表現の能力を伸ばすことが音楽 I の指導目標でもある。それに対して創作の領域は、表現する音楽そのものを自ら作り出す活動が中心であり、これは前者と違い一次的な創作活動である。

創作という概念は音楽の根幹を成すものなのである。しかしながら、創作を全く経験したことがない生徒が、いきなり曲をつくるというのは大変難しい。メロディを思いついても楽譜に書けなければ忘れてしまったり、曲ができて正確に演奏できなければ他人に伝えることはできない。創作してそれを発表するためには、ある程度の知識と技術が必要なのである。生徒は、このメロディは何か変、この和音は何かカッコイイ、など「理由はわからないが」感覚的に良いものと悪いものを聞き分けているようである。創作学習では、その「何か」とは何なのかを明らかにしていく授業を展開していきたい。「何か」(=音楽を形づくっている要素)を学習する方法としては、鑑賞を通して行うのがわかりやすいと思われる。また、音楽を形づくっている要素は大変多く、1単元

で扱うには学習範囲が広すぎる。そのため、音楽 I の全ての領域(歌唱、器楽、創作、鑑賞)にまたがり、年間を通して創作活動を行う試みを行った。

2 研究の目的・方法

授業の際に最も活用される教材は教科書であるが、教科書の創作に関するページを見てみると、大きく4つのパターンに分けることができる。その4つとは、①詩の抑揚に合わせた旋律創作、②打楽器類を主とした環境音を描写する創作、③和音やリズムを指定し、その範囲内で選択的に創作④完全に偶然性に任せた創作である。中には、「和音が指定してあり、詩の抑揚に合わせて音を選択的に上下させる」というような、これらが組み合わさっているものも見られる。これらの多くは1~2ページに内容が収まっており、1~2時間扱いになっていることがほとんどである。これだけでは、先述したような創造的な表現の能力を高める創作の能力を身に付けることは困難であるが、創作だけに多くの時間を割くことができないのも学校現場の実状である。そこで、年間指導計画上、他の領域の時間を削減せずに創作の授業時間を確保し、生徒の創造的な表現の能力を伸ばすことのできる指導計画を作成し、その効果を明らかにすることを研究の目的とした。対象とした具体的内容及び方法は次のとおりである。

題材名 「これで君もシンガーソングライター！」

課題 音楽の様々な要素を学習し、それらを用いてオリジナルソングをつくろう。

題材の目標

- ・自分の心情を音楽で表現することを通して、音楽に対する興味関心と自己表現力を高める。
- ・創作した楽曲を記譜する事を通して、音楽用語の知識や記譜・読譜の力を身に付ける。
- ・創作に関わる様々な音楽の要素について学習することで、音楽を構造的な側面からも感じ取ることができるようになる。

* 熊本県立天草高等学校

** 熊本大学教育学部音楽科

3 生徒の実態と指導方針

高等学校の学習内容は、中学校の内容を踏まえ、さらに発展させたものであると言える。そのため中学校での学習を十分理解していないと、高等学校の内容は難しい。また、高等学校では中学校の内容に加え「音楽を形づくっている要素」を学習する項目が2つ追加されている。それは、下表（高等学校・音楽Ⅰ）の「ウ 音楽を形づくっている要素の働きを変化させ、イメージをもって変奏や編曲をすること。」と「エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して音楽をつくること。」の2項目である。音楽選択者は授業に意欲を持って取り組む生徒が多く、授業中も活発に活動をしており、特に表現の領域「歌唱」「器楽」については大変積極的に取り組んでいる。中学校において創作の活動は

ほとんど経験がないと思われ、同じ表現領域ではあるものの「創作」に対しては苦手意識が強い。しかし「創作」をやってみたいという意欲は大変高く、創作活動も活発に行っている。

また、楽譜のみの情報から音楽を感じ、自分で工夫して表現をすることに関して苦手意識が強いと思われるが、音楽を感受する力が素晴らしく、楽譜に頼らずともすぐに音楽を覚えて表情豊かに演奏することができる。これらを考慮し、高等学校で初めて示される「音楽を形づくっている要素」を学習することを授業の中心に据え、「要素を用いて、音を音楽へと構造化する」授業にしていきたい。下表（高等学校・音楽Ⅰ）のア・イについては、中学校での内容の発展であるため、中学校第1学年で扱う内容から段階的に行っていく。

表1 平成20年中学校および平成21年高等学校学習指導要領における創作の内容

中学校		高等学校
第1学年	第2及び第3学年	音楽Ⅰ
A 表現 (3) 創作の活動 ア 言葉や音階などの特徴を感じ取り、表現を工夫して簡単な旋律をつくること。 イ 表現したいイメージを持ち、音素材の特徴を感じ取り、反復、変化、対照などの構成を工夫しながら音楽をつくること。	A 表現 (3) 創作の活動 ア 言葉や音階などの特徴を生かし、表現を工夫して旋律をつくること。 イ 表現したいイメージを持ち、音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりを工夫しながら音楽をつくること。	A 表現 (3) 創作 ア 音階を選んで旋律をつくり、その旋律に副次的な旋律や和音などを付けて、イメージをもって音楽をつくること。 イ 音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成を工夫して、イメージをもって音楽をつくること。 ウ 音楽を形づくっている要素の働きを変化させ、イメージをもって変奏や編曲をすること。 エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して音楽をつくること。

4 題材の評価規準と学習活動における具体の評価基準

題材の観点別評価規準と、各時間における具体の評価基準を表に示したものである。【領域・時間】

表2 題材の観点別評価規準および具体の評価基準表

	関心意欲態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
題材の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲的に創作活動に取り組んでいる。 ・音楽を形づくっている要素に興味を持って活動に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を形づくっている要素を感じ取ることができる。 ・自分が感じていることを音楽で表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を形づくっている要素を感じ取り、それらが楽曲にどのような効果を与えているのかを考え、楽曲を批評することができる。 ・自分が表現したいことを楽譜に記したり、楽譜に記されたものを自分なりに表現したりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を形づくっている要素を感じ取り、それらが楽曲にどのような効果を与えているのか、作曲者が何を意図して作曲したのかなどを考えながら鑑賞することができる。
学習活動における具体の評価基準	<ul style="list-style-type: none"> ・コード進行をたくさんつくることできる。【創作・6時間目】 ・できるだけ長いコード進行を考えることができる。【創作・7時間目】 ・創作の課題に意欲的に取り組んでいる。【創作・12時間目】 ・音程や和音の響きに興味を持ち、積極的に活動に取り組んでいる。【創作・15時間目】 ・グループ学習において、他人任せにせず、自ら役割を見つけて活動に取り組んでいる。【創作・16、17時間目】 ・他のグループが発表している際に、静かに聴くことができる。【鑑賞・18時間目】 	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムが持つ雰囲気を感じ取り、それぞれのリズムについて自分の感想を述べることできる。【鑑賞・1時間目】 ・歌詞と旋律との関係を感じ取り、作曲者の意図が伝わるように表現を工夫して歌うことできる。【歌唱・4、5時間目】 ・音階の違いによる雰囲気の違いを感じ取ることができ、その雰囲気を出せるように工夫しながら演奏することができる。【器楽・10時間目】 ・表現したい内容をイメージしながら、それに相応しい和音をつくることできる。【創作・15時間目】 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜から、様々な音楽の要素を読み取ることができ、それを演奏で表現することができる。【創作・3時間目】 ・自分が創作した作品を、相手に伝わるように楽譜に書き記すことできる。【創作・3、13時間目】 ・ギターで正確にコードを弾くことができる。【器楽・8時間目】 ・和声音・非和声音を理解し、それらを使いこなしながら旋律を創作することができる。【創作・14時間目】 	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムを感じ取り、それらが楽曲にどのような効果を与えているのかを考えながら鑑賞することができる。【鑑賞・2時間目】 ・主題の展開技法について理解し、それらの技法を感じ取りながら鑑賞することができる。【鑑賞・9時間目】 ・様々な音階を聴き分け、それぞれの雰囲気を感じ取ることができる。【鑑賞・11時間目】 ・他者の演奏発表を聴いて、意見をしたり、自分では気がつかなかった新しい発見をしたりできる。【鑑賞・18時間目】

5 題材の指導計画と評価計画（全18時間）

次	ねらい	時数	主な学習内容と活動	教師の働きかけ・準備	学習活動における具体的評価基準【評価方法】
第1次	舞曲のリズムパターン	2	「o sole mio」を歌うことを通して、「ハバネラ」のリズムとその特性を学習する。また、その他の舞曲のリズムについても学習することで、リズムのもつ面白さや、旋律以外の要素の働きを感じ取れるようになる。	同じハバネラのリズムで作曲されている有名な楽曲、歌劇「カルメンより ハバネラ」（ビゼー作曲）を紹介することで、よりハバネラのリズムの特徴を感じ取らせやすくする。また、「o sole mio」を別のリズムパターンで歌ったり、別のリズムパターンを用いて作曲された楽曲（ラヴェル作曲の「ボレロ」や）を紹介したりすることで、リズムに興味を持たせる。	リズムが持つ雰囲気を感じ取り、それぞれのリズムについて自分の感想を述べることができる。 【発表・ノート】 リズムを感じ取り、それらが楽曲にどのような効果を与えているのかを考えながら鑑賞することができる。 【ワークシート】
	図形楽譜を用いた創作	1	図形楽譜の記譜法を学び、楽曲の創作を体験する。	図形楽譜による簡単な作曲例を準備しておく。楽譜を見せながら実際に演奏してみせ、図形楽譜と音楽との関わりを考えさせる。図形楽譜を演奏させることから始め、図形楽譜に慣れさせてから創作活動に入るようにする。	楽譜から、様々な音楽の要素を読み取ることができ、それを演奏で表現することができる。 【発表】 自分が創作した作品を、相手に伝わるように楽譜に書き記すことができる。 【ワークシート】
	歌詞が持つ抑揚や強勢と旋律との関係	2	「野ばら」（シューベルト作曲）と「野ばら」（ウェルナー作曲）を歌い比べ、歌詞と旋律の関係について学習する。	歌詞と旋律との関係を考えさせられるよう、歌詞を覚えるまでしっかりと朗読させる。また、その際にドイツ語朗読のCDを聴かせ、ドイツ語の発音や抑揚を感じ取らせる。	歌詞と旋律との関係を感じ取り、作曲者の意図が伝わるように表現を工夫して歌うことができる。 【発表・観察】
	和音の種類と音楽的機能	3	和声の機能やその進行について学習する。 オリジナルのコード進行を考え、考えた進行をギターで演奏する。	和声理論は難しいため、「指使いが似ていると響きが似ている」など、ギターのコード学習を中心にして授業を展開する。コード進行表を用意し、選択するだけで正しい（理論に則った）進行が作れるようにしておく。歌謡曲など流行歌のコード進行を紹介し、コード進行に興味を持たせる。	コード進行をたくさんつくることができる。 【ワークシート】 できるだけ長いコード進行を考えることができる。 【ワークシート】 ギターで正確にコードを弾くことができる。【発表】
	楽曲の構成	1	「交響曲第9番 新世界より 第1楽章」（ドボルザーク作曲）を鑑賞し、反復、変化、対照などの楽曲の構成や作曲家の工夫を学習する。	主題の展開技法について説明し、それぞれの技法とその効果を考えさせる。オーケストラで用いられる楽器を紹介し、それらの組み合わせとその効果を考えさせる。	主題の展開技法について理解し、それらの技法を感じ取りながら鑑賞することができる。 【ワークシート・発表】

	様々な音階や旋法	2	一般的な音階である長旋法、短旋法（長調、短調）に加え、我が国の旋法である呂旋法、律旋法、琉球音階などを学習し、それぞれの音階や旋法の特徴を考える。	ピアノやリコーダーで「すぐに音階を演奏する」技術を持ち合わせていない生徒も多いので、調弦を変えることで簡単に様々な音階を容易に演奏することができる「箏」を用いる。 「かえるのうた」など簡単な楽曲を移旋して演奏し、音階や旋法の特徴を感じ取らせやすくする。	音階の違いによる雰囲気の違いを感じ取ることができ、その雰囲気を出せるように工夫しながら演奏することができる。 【発表・観察】 様々な音階を聴き分け、それぞれの雰囲気を感じ取ることができる。 【ワークシート・発表】
第2次	旋律の創作	2	短い文章や詩を用いて、言葉の抑揚から旋律をつくる方法を学習する。	例として、短い歌詞による簡単な作品をいくつか用意しておく。活動がなかなか進まない場合には、生徒が持ってきた文章を用いていくつか創作例を示す。	創作の課題に意欲的に取り組んでいる。【観察】 自分が創作した作品を、相手に伝わるように楽譜に書き記すことができる。 【ワークシート】
	創作した旋律にコードを付ける	2	コード表を基にしてコード進行をつくる。 コードの構成音から旋律を創作する方法を学習する。 和音の響きが醸し出す雰囲気を感知取る。 様々な種類の和音を学習し、音程と響きの関係を考える。	最近の流行歌など生徒が好きな楽曲や、一般に名曲と呼ばれているクラシック音楽に使用されているコード進行を紹介することで、自分たちにも凄い作品を作ることができる可能性があるという期待感や希望を持たせる。 音程や和音に関する理論は苦手な生徒が多いため、トーンチャイムを利用して生徒自らが和音を作る体験的な学習にする。 様々な種類の和音を紹介し、それがどのように使用されるのかを説明する。	表現したい内容をイメージしながら、それに相応しい和音をつくることができる。【発表】 和声音・非和音を理解し、それらを使いこなしながら旋律を創作することができる。【ワークシート】 音程や和音の響きに興味を持ち、積極的に活動に取り組んでいる。【観察・発表】
	副次的な旋律や伴奏をつくる	2	創作した旋律にハーモニー声部を加えて合唱にする方法を学習する。 コード進行とリズムパターンを組み合わせる伴奏を創作する。	これまでに学習してきたことを簡単に復習し、「舞曲のリズムパターン」「楽曲の構成」「コード進行」を活用して創作ができるようにする。	グループ学習において、他人任せにせず、自ら役割を見つけて活動に取り組んでいる。【観察】
第3次	作品を互いに鑑賞し合う	1	創作した作品を鑑賞し合い、作品を互いに評価しあう。	どの作品も一所懸命に作られたものなので、どこに工夫があるかをしっかりと考えながら鑑賞するように伝える。 自分や自分のグループでは思いつかなかったアイデアを探し、互いに勉強し合う姿勢で鑑賞するようにさせる。 どういうところに工夫があるかをしっかりと考えながら鑑賞させる。	他者の演奏発表を聴いて、意見をしたり、自分では気がつかなかった新しい発見をしたりできる。 【発表・ワークシート】 他のグループが発表している際に、静かに聴くことができる。【観察】

6 実施計画の概要

(1) 実施内容

歌詞の内容から適切な音素材を選択し、歌詞の抑揚や感情の起伏に合わせて旋律を創作し、その旋律に副次的な旋律を付け加えたり和音を加えたりして伴奏を付ける。また、創作した歌曲について発表を行う。その際には、楽曲で用いた音素材や旋律・伴奏の工夫点等を、歌詞の解釈とともに説明する。以上の活動を、次のとおり段階的に行う。

- 第1回 舞曲のリズムパターンを学習する。
- 第2回 舞曲のリズムパターンを用いた変奏曲を演奏したり、鑑賞したりする。
- 第3回 図形楽譜を用いた創作活動を行う。
- 第4回 歌詞が持つ抑揚や強勢と、旋律との関係を考える。
- 第5回 歌詞が持つ抑揚や強勢と、旋律との関係を考える。(第2回)
- 第6回 トニック・ドミナントの音楽的機能、和声音の構成音について理解する。
- 第7回 サブドミナントの音楽的機能、非和声音について理解する。
- 第8回 和声進行の規則を学び、オリジナルのコード進行を考える。
- 第9回 反復・変化・対照などの音楽の構成を学習する。
- 第10回 様々な旋法・音階を学ぶ。(平調子)
- 第11回 様々な旋法・音階を学ぶ。(雲井調子・陽旋法・沖縄音階)
- 第12回 音階を選び、その音階を用いて簡単な旋律を創作する。
- 第13回 歌詞の内容や抑揚から旋律を創作する。
- 第14回 創作した旋律にコードをつける。
- 第15回 色々なコードの響きを学習し、コードの違いによる雰囲気の違いについて考える。
- 第16回 創作したコードにリズムをつけ、伴奏をつくる。
- 第17回 創作した歌曲を練習する。
- 第18回 創作した歌曲を発表し、お互いに演奏を聴きあう。

(2) 実施日

- 第1回 5月18日・26日実施
- 第2回 5月25日・31日実施
- 第3回 7月6日・7日実施
- 第4回 8月31日・9月1日実施
- 第5回 9月7日・8日実施

- 第6回 9月7日・8日実施
- 第7回 9月14日・15日実施
- 第8回 9月28日・29日実施
- 第9回 9月29日・10月5日実施
- 第10回 10月26日・27日実施
- 第11回 11月9日・10日実施
- 第12回 11月16日・17日実施
- 第13回 11月30日・12月1日実施
- 第14回 1月18日・19日実施
- 第15回 1月25日・27日実施
- 第16回 2月8日・9日実施
- 第17回 2月8日・9日実施
- 第18回 2月22日・23日実施

学習内容の関係上、1学期から行っている内容もある。

音楽は2時間続けて授業があるため、1日で2回分(2時間分)行っていることがある。

7 各回の授業における生徒の反応と課題

第1回 様々なリズムパターンを学習する。

歌唱「o sole mio」のハバネラのリズムに関連付けて、様々な舞曲のリズムを紹介した。音楽ノート(MUSIC NOTE、九州高等学校音楽教育研究会編、副教材)に記載されている「舞曲のリズムパターン」から、「o sole mio」の伴奏リズムと同じものを探し出し、楽譜を読みながらハバネラのリズムを演奏する活動を行った。手拍子や足踏みをしながリズムを奏したことで、ハバネラ独特の雰囲気を感じ取ることができたようだ。音楽ノートには他にもたくさんの舞曲のリズムが載っているため、それぞれのリズムを用いた有名な楽曲をピアノで演奏した。リズムの違いを感じ取ることを行っていたが、生徒の感想から判断するに、リズムの違いより旋律や調性等のリズム以外の要素から音楽を感じていたようだ。

第2回 舞曲のリズムパターンを用いた変奏曲を演奏したり、鑑賞したりする。

「o sole mio」はハバネラのリズムによる陽気なカンツォーネであるが、それをロックのリズムやジャズのリズムで演奏しているものがある。本時ではそれらの楽曲を鑑賞する活動を行った。また、校歌を様々な舞曲のリズムで変奏することにより、リズムが醸し出す雰囲気を感じ取る活動を行った。歌ったことのある楽曲を違うリズムで演奏したり鑑賞したりすることで、リズムによる違いの面白さを感じ

取ったようだ。

第3回 図形楽譜を用いた創作活動を行う。

五線による楽譜が書けなくても音楽を記すことができることを説明し、図形による記譜（図形楽譜）の授業を行った。今の気持ちを図形楽譜に表し、自由に表現するという創作だったが、生徒にとっては初めての経験だったようで、最初は戸惑いを感じていたようだ。しかし、最後は素晴らしい作品を発表してくれた。活動全体を通して非常に意欲的に取り組んでいた。しかし、図形を書くことに重点を置き過ぎてしまったため、それを音楽としてどのように感じるのか（図形楽譜を演奏する）という部分が少なくなり、図形楽譜と音楽との関連性があまり見えない授業となってしまった。

第4回 歌詞が持つ抑揚や強勢と、旋律との関係を考える。

「野ばら」（シューベルト作曲）を学習し、ドイツ語の歌詞が持つ抑揚や強勢と旋律との関係を考える授業を行った。ドイツ語の抑揚やアクセントに合わせてリズムや旋律の高低が考えられているということを伝えたかった。しかし、ドイツ語は生徒にとって初めての言語であり、その抑揚やアクセントと音楽の関係性を考えることは大変難しかったようである。

第5回 歌詞が持つ抑揚や強勢と、旋律との関係を考える。（第2回）

「野ばら」（ヴェルナー作曲）を学習し、「野ばら」（シューベルト作曲）との違いについて考える授業を行った。同じ歌詞から作曲されている2曲を比較しながら歌うことで、旋律やリズムが音楽に与える影響について考えることができたようだ。どちらの楽曲が好きか、その理由を考える活動も行ったが、生徒の中から「シューベルトの方が歌詞を歌いやすいリズムである」などの意見が出てきたことから旋律と歌詞の関連性を感じ取ることができたことがうかがえる。

第6回 トニック・ドミナントの音楽的機能、和声音の構成音について理解する。

C・Am7・G7を学習し、構成音が似ている和音とそうでない和音の違いを考えさせる授業を行った。構成音と和音的機能の関連性について考えることは、楽譜上だと理解はできても実感することが難しい。今回はギターの実技を伴いながらの授業だったので、運指の共通性や実際の響きから、関連性を学習でき

たようだ。しかし、実技の技能に個人差があり、コードを押さえることに精一杯で和音の機能等を考える余裕のない生徒もいた。

第7回 サブドミナントの音楽的機能、非和声音について理解する。

Dm7・Fのコード、サブドミナントの音楽的機能、非和声音についての授業を行った。

非和声音の学習は「音が濁る」といった感覚的な要素が強く、指導が難しい。ギターのコードを使って授業をすればわかりやすいと考えたが、非和声音（運指上弾かない弦）も気にせず弾く生徒が多く、ギター運指の指導がメインになってしまった。

第8回 和声進行の規則を学び、オリジナルのコード進行を考える。

Em・E・GM7・D・B7のコード、和声進行の規則を指導し、その後、コード表を基にコード進行を考えさせた。和声進行の規則は大変複雑で難しいが、一番基礎となるところのみを授業した。その結果全員がオリジナルのコード進行を作成し、それをギターで演奏する活動を行うことができた。しかし、中にはプリントの表を見ながら機械的にコード進行を作成する生徒もおり、まだまだ工夫が必要であることがわかった。

第9回 反復・変化・対照などの音楽の構成を学習する。

「交響曲第9番 新世界より 第1楽章」（ドボルザーク作曲）を聴き、反復・変化・対照などの音楽の構成について考えた上で鑑賞する授業を行った。最初は難しそうに説明を聞いていた生徒も、実例を挙げながら説明していく中で、だんだんと理解ができていたようだ。鑑賞後の感想についても、音楽の構造的な側面から記述されたものが多く見られた。しかし、理解の個人差が大きく、授業時にその差を埋める手立てができなかったことから、差が開いたままとなってしまった。次の時間で指導が必要である。また、本時の授業は説明が多く、その他の時間も聴くことが中心だったために、生徒が主体的に活動をする時間がとれなかった。

第10回 様々な旋法・音階を学ぶ。（平調子）

長旋法・短旋法に加え、我が国の旋法（呂旋法・律旋法・陽旋法・陰旋法・沖繩音階）を箏の学習時に指導する。本時では平調子の説明をした後に、平調子で箏を調弦する活動を行った。全員で1本1本調弦をしていくのはとても大変で、平調子の説明と

13本の弦を全て調弦するので1時間まるまるかかってしまった。時間はかかったが、自分で調弦をする機会はなかなかないので、和楽器に触れることを通して日本の音楽に対する関心をもたせることができた。調弦後に箏をかき鳴らし「和風だ!」という声が多数聞こえたことから、旋法の雰囲気は十分に感じ取らせることができたことがわかった。

第11回 様々な旋法・音階を学ぶ。(雲井調子・陽旋法・沖縄音階)

荒城の月は、前回までに学習した「平調子」とは異なる調弦である。調弦の違い(=旋法の違い)が楽曲の雰囲気はどう影響するのかを感じ取らせる授業を行った。荒城の月で使用される音階に関連させ、その他の音階も紹介した。沖縄音階については「沖縄っばい」という印象を受けたようであるが、それ以外の音階については「日本的・和風」といった具合にひとまとまりという印象で、それぞれの持ち味を十分に聴き分けるといふ所までには至らなかった。

第12回 音階を選び、その音階を用いて簡単な旋律を創作する。

ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの8音を用いて、4小節の旋律を創作する授業を行った。

音とリズムを同時につくることが難しいようだったので、リズムを予め提示しておき、そこに音を当てはめるといった内容にした。リズムが同じでも、つく人が替われば全く異なる音楽になることに驚いていたようだった。今回は8音(ハ調長音階)に限定したために、「音階を選び」という部分はできなかったが、次回以降に行うことにした。

第13回 歌詞の内容や抑揚から旋律を創作する。

「今日の朝は味噌汁」などの簡単な文章を朗読し、その抑揚通りに音符を並べて旋律にする授業を行った。歌詞の抑揚を考えてつくった場合とそうでない場合を聴き比べ、どちらが歌いやすいか伝わりやすいかを考えさせた。第4回・5回で行った授業との関連もあり、違いを理解してくれたようである。しかし、普段生徒たちが聴いている音楽の中には、言葉より旋律線を強調しているものもある。そのため、歌詞の内容や抑揚よりも旋律線を優先させたいという意見もあった。旋律を重視する作曲技法もあるが、今回の取り組みとは異なる技法であるため、それについては作例を示すだけに留めた。

第14回 創作した旋律にコードをつける。

前回創作した旋律にコードをつけるという学習内

容であったが、生徒にとっては大変難しく、全くと言っていいほど進まない状態であった。そのため、旋律にコードをつけるのではなく、コードから旋律をつくる学習に変更した。コードの構成音から音を選び旋律をつくる方法は生徒も理解し、活発な創作活動を行うことができた。コードと旋律とをいかにして結び付けるかが課題であったが、この学習をすることでそれを行うことができた。

8 考 察

「創作」の単元を設けることをほとんど行わず、それぞれの分野で関連性のあるものを取り上げるという形をとったことで、創作に関連する授業時数を多く確保することができた。

活動の中で、生徒の様子に変化が見られたが、特に変化が見られたのは第3回と第9回であった。第3回では図形による記譜と創作を行った。創作に対する苦手意識をなくすことを目的とした授業だったが、生徒は楽譜に対する興味も出てきたようだ。その後、ギターや箏の授業時に「タブラチュア譜」を用いて授業を行ったが、大変興味を持って読譜を行っていた。しかし、創作したものを記譜させると、予想していたよりも楽譜を書く作業に時間がかかってしまった。記譜のルールを知らないばかりか、ト音記号や四分休符といった基本的な音符記号を書けない生徒が多く、これまでに楽譜を記譜する経験がほとんどないことがわかった。そこで、予定していなかった記譜についての授業を行うことになったが、結果として全員が正しい記譜法を身に付けることができ、記譜を通して用語や記号についての知識も大幅に向上した。このことから、授業計画について、記譜関連の内容をより多くすることで、創作した楽曲を記譜する事を通し、音楽用語の知識や記譜・読譜の能力を向上させることができると言えよう。特に、楽譜に対して苦手意識の強い生徒たちが興味を持って記譜の授業を受けていたという点は大きいと言える。

第9回の授業以降、鑑賞授業時に提出する生徒の感想が目に見えて変化した。それまでは「明るくて楽しい曲だった」「○○の情景が思い浮かんだ」といった感想がほとんどだったが、「最初のテーマが何度も繰り返されることで緊張感が出ていると思った」というように、音楽の構造的な側面に着目した感想も書くようになった。より幅の広い視点から楽曲を捉えることができるようになったと言え、これは、創作に関わる様々な音楽の要素について学習することで、音楽を構造的な側面からも感じ取ること

ができるようになることに繋がると考えられる。

創作活動は、はじめは個人での活動にしていたが、慣れてからは4～6人のグループを組んでのバンド活動に変更した。グループの中で担当を決める際、どういう編成のバンドにするのかという話し合いをさせたが、その話し合いが有意義であったように感じる。誰がヴォーカルで誰がギターで…というように進めていたが、どの班も自分たちが好きなバンドの曲を参考にしていたようだ。話し合いの中で、「でもあのバンドはギター担当2人おるよ」「ハモる時だけキーボードも歌っとるよ」「後ろで踊る人もいた方が盛り上がるんじゃないか」といった意見が活発に出されていた。授業後、家庭でテレビやDVD

等を利用して好きなバンドの編成を確認している生徒も多数おり、音楽に対する興味関心を高めるきっかけとなったと言える。また、これまではバンドやオーケストラの編成はほとんど気にせずに音楽を鑑賞していたように見受けられたが、この活動を通して、鑑賞する視野が広がったようである。

はじめは戸惑いがあったように見えた、グループでの創作活動であるが、歌詞を自作してくる生徒、得意な楽器を進んで担当する生徒など、それぞれが得意な分野で創作に関わることでグループが生き生きとしてきている。この取り組みが自己表現・自己アピールの場にもなるのではないかと期待している。